

◆2021年1月第1週のメッセージ

■日時：2021年1月3日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。」

■聖書：マルコによる福音書 11：12－33（新 p84）

■讃美歌：351「聖なる聖なる」463「わが行くみち」

明けましておめでとうございます。

2021年を迎えました。

コロナで始まりコロナで終わった2020年を振り返りながら、新しい年となった今年こそは、コロナの収束の時を迎えたいと思います。そして、私たちの教会も、3月7日（日）の礼拝から、皆、再びこの場に集い、共に讃美し、祈り、御言葉に聴く時が与えられることを切に願うのです。

2021年初めての主の日ですが、今日与えられた御言葉は、新年に相応しいものとなりました。真（まこと）の礼拝とは何か、祈りとは何かが語られているからです。

それでは、御言葉を見てまいりましょう。

マルコによる福音書 11章 12節から 33節、ここでは4つの話が記されています。

今日は、新共同訳聖書の小見出しから見て行きます。

まず「いちじくの木を呪う」話しです。次に「神殿から商人を追い出す」話しで、さらに「枯れたいちじくの木々の教訓」の話し、そして最後が「権威についての問答」です。

内容はそれぞれに違いはありますが、この4つの話しを貫いているものがあります。

それは、真（まこと）の礼拝とは何かが問われていることです。

順を追って見て行きます。

第1の話しが記されている12節から14節です。

12：翌日、一行がベタニアを出るとき、イエスは空腹を覚えられた。

13：そこで、葉の茂ったいちじくの木を遠くから見て、実がなっていないかと近寄らしたが、葉のほかは何もなかった。いちじくの季節ではなかったからである。

14：イエスはその木に向かって、「今から後いつまでも、お前から実を食べる者がいないように」と言われた。弟子たちはこれを聞いていた。

季節外れのいちじくの木に対する話しです。

ここで問題となるのは、13節の「葉の茂ったいちじくの木」という言葉です。いちじくは、当時のユダヤ社会では、棕櫚に次いで親しまれていました。その木に青々とした葉が生い茂っている。当然、人は豊かな葉を見て、いちじくの実も沢山なっていることを期待します。しかし、いちじくが実を実らせるのは、秋と春の初めであり、過ぎ越しの祭りのこの時期は季節外れでした。当然、木は、実をつけていません。そのことを承知の上で、イエス様はこの木に近づいたのです。

イエス様がいちじくの木に見たもの、それはイスラエルであり、そこに生きる人々でした。

外から見れば、青々とした葉が生い茂っています。イスラエル民族が繁栄している様（さま）です。このように栄えている民族であれば、どれほど豊かな実がなっているかを思わせます。豊かな実、それは、この木を生い茂らせた神様に対する感謝であり、その教えを守り、真実な礼拝が捧げられていることでした。しかし、その実を期待して近づいた時、そこには「葉のほかは何もなかった」、つまり、外から見れば繁栄しているかのように見えたにもかかわらず、中に割って入れば、期待した実を見出せない、即ち真実の礼拝を行っている何もかも見出すことが出来なかったのです。イエス様のこの木に対する厳しい言葉は、同胞であるイスラエル民族に対する言葉でした。

そして、真実の礼拝とは何かが示されます。

15節から19節です。

15：それから、一行はエルサレムに来た。イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いしていた人々を追い出し始め、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返された。

16：また、境内を通過して物を運ぶこともお許しにならなかった。

17：そして、人々に教えて言われた。「こう書いてあるではないか。

『わたしの家は、すべての国の人の

祈りの家と呼ばれるべきである。』

ところが、あなたたちは

それを強盗の巣にしてしまった。」

18：祭司長たちや律法学者たちはこれを聞いて、イエスをどのようにして殺そうかと謀った。群衆が皆その教えに打たれていたもので、彼らはイエスを恐れたからである。

19：夕方になると、イエスは弟子たちと都の外に出て行かれた。

エルサレム神殿、それはユダヤ民族にとって、神様を礼拝する最も神聖な場所であり、彼らの信仰と生活の土台をなすものでした。礼拝をするには捧げ物が必要です。神殿の境内には、祭司長らから許可を得た捧げ物としての鳩などの動物を売る商人や両替商などが店を並べていました。神殿で献金するには、特別に指定された古代ヘブライのシケル通貨が必要でした。人々は日常使用しているローマ帝国の通貨からシケル通貨に換えるため、両替商に手数料を払って交換していたのです。又「境内を通過して物を運ぶ」とは、店を構えるに必要な家具や売上金を入れる壺などを、城門への近道として神殿の境内を通過して運んでいたことを意味します。イエス様は、そこにいた商売人たち全てを追い出します。

「『わたしの家は、すべての国の人の

祈りの家と呼ばれるべきである。』

ところが、あなたたちは

それを強盗の巣にしてしまった。」と。

商売の全否定、それは単に商売人たちを追い出すだけに止（とど）まりません。

彼らに商売の許可を与え、人々の宗教心に依拠することによって、その権威と権力を恣（ほしいまま）にしてきた祭司長や律法学者たちに対して、真っ向から戦いを挑むものでした。そして、祭司長や律法学者たちも又、彼らが寄り頼んでいた権力基盤が崩され始めたことを知って、それは、人々が、祭司長や律法学者より、イエス様への信頼を深めて行ったことにもよるのですが、イエス様への殺意をさらに強めて行くのです。

20 節から 25 節です。

20：翌朝早く、一行は通りがかりに、あのいちじくの木が根元から枯れているのを見た。

21：そこでペトロは思い出してイエスに言った。「先生、御覧ください。あなたが呪われ

たいいちじくの木が、枯れています。」

22：そこで、イエスは言われた。「神を信じなさい。

23：はっきり言うておく。だれでもこの山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言ひ、少しも疑わず、自分の言うとおりになると信じるならば、そのとおりになる。

24：だから、言うておく。祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになる。

25：また、立って祈るとき、だれかに対して何か恨みに思うことがあれば、赦してあげなさい。そうすれば、あなたがたの天の父も、あなたがたの過ちを赦してくださる。

ここでは、始めに 20 節の「いちじくの木が根元から枯れている」と言う言葉に目を留めます。根本から枯れると言うのは、ある注解者が言っているように「完全な破壊」

(p273) を意味します。つまり、見せかけだけの信仰に対する否定であり、それは「強盗の巣」となってしまった神殿礼拝の全面的な拒絶でした。その上で、それでは信仰とは何かが、ペトロの言葉に端を発して語られます。

真の信仰について、22 節の「神を信じなさい」を見て行きます。ある注解者によれば、この言葉の正確な訳は、「神が自ら持つ信頼」、即ち神様が自らに持っている確信と言うのです。つまり、神様が自分に対して持つほどの確信を持てば、どのような奇跡でも起こす

ことが出来る。真の礼拝とは、このような信仰を持って行うものであり、真実の信仰を持ってなされる礼拝こそ、真の礼拝であると言われました。

さらに、25 節です。

礼拝を捧げる時、自分の犯した過ちが神様によって赦されていることを知らなければなりません。そして、それは同時に、隣人に対して許せないことがあれば、それを許すことによって初めて神様の赦しが得られることを意味します。隣人を許さずして、自分が赦されることはないとも言われました。

今日の最後の箇所、27 節から 33 節です。

27：一行はまたエルサレムに来た。イエスが神殿の境内を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちがやって来て、

28：言った。「何の権威で、このようなことをしているのか。だれが、そうする権威を与えたのか。」

29：イエスは言われた。「では、一つ尋ねるから、それに答えなさい。そうしたら、何の権威でこのようなことをするのか、あなたたちに言おう。

30：ヨハネの洗礼（バプテスマ）は天からのものだったか、それとも、人からのものだったか。答えなさい。」

31：彼らは論じ合った。「『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と言うだろう。

32：しかし、『人からのものだ』と言えば・・・。」彼らは群衆が恐かった。皆が、ヨハネは本当に預言者だと思っていたからである。

33：そこで、彼らはイエスに、「分からない」と答えた。すると、イエスは言われた。「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい。」

ここでは、これまでの祭司長や律法学者に加えて、長老までも加わります。つまり、ユダヤ社会における最高権力者たちが登場して、権力と権威を行使する拠り所についての議論が行われます。彼らはイエス様に尋ねます。何の権威でこのようなことを行うのかと。即

ち、病人の癒しや、時として律法を破る、挙句の果てはエルサレム神殿から商人たちを追い出し、人々が礼拝が出来なくなってしまった。一体何の権威によってこのようなことをしたのかと問いただしたのです。権力者たちの意図は、もし神によって与えられた権威だとイエス様が言えば、神を冒瀆する者として捕らえ、裁判にかけ、死刑を言い渡すことでした。しかし、イエス様は、逆に彼らに問うのです。「ヨハネの洗礼（バプテスマ）は天からのものだったか、それとも人からのものだったか」と。

彼らは答えられませんでした。そして、イエス様も答えることをしませんでした。

イエス様がなされた数多くの力ある業、又時において安息日の掟をも破る行為、そして最高権力者をも黙らせる問答、その全てが神様から与えられた力であるにもかかわらず、そのことを明らかにすることはせず、ただ神様によって備えられた道を進んで行くのです。しかし、十字架に向かうその道を進むたびごとに、ユダヤ社会にはびこっていた偽善や不義は暴かれて行きます。そして遂に、ここに至り、祭司長、律法学者、長老たちの権力と権威の拠り所であったエルサレム神殿での礼拝までも否定されて行きました。

ただ、これらの厳しさを貫いているもの、それこそが、真なる礼拝であったのです。

イエス様の十字架への道、それは、私たち一人ひとりに、神様の赦しを与え、真の礼拝を捧げる備えをするものでした。

2021年の新年礼拝で、神様から与えられた御言葉は、真の礼拝についてです。

それは、祈りと、信仰の確信によってなされるものであるのです。

祈りましょう。